

DPC データを活用した 病院経営改善事例

病院ビッグデータ革命

薬剤科 薬剤長 小野 勝さま
副院長・看護部長 半場 江利子さま
看護部管理室 副看護師長 白石 三智さま

京都市立病院

ハイリスク薬に対する
薬剤管理指導料の算定件数が

前年比

3.6

倍に!!

薬剤管理指導料 算定率向上の取り組み

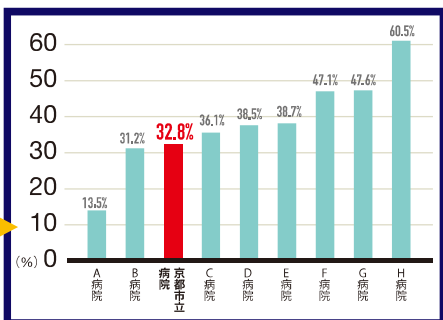
1 Medical Code活用研究会に参加

1 他施設とのデータ共有・ベンチマークにより
自院の現状を把握

2,699件、32.8%

算定率が参加9施設の
平均と比べて低い

= 患者が十分な医療サービスを受けられていない



2 他施設との情報交換・ディスカッションにより
4つの問題点が明らかに

- ①各職種が必要な情報を互いに把握できていない
- ②薬剤管理指導料1の算定件数が少ない
- ③患者の予定が把握できず、指導時期を逃している
- ④予定していた通りの薬剤管理指導ができない

特に①と③は、Medical Code活用研究会に参加したことで、自院だけでなく、他施設も抱えている問題とわかり、問題解決に踏み出した

2 問題解決に向けた具体的な取り組み

①PFC作成
職種間の情報ニーズを
可視化

- これまで
- 薬剤科だけのマニュアルはあったが他職種との連携がなかった
 - 職種間の情報共有を個人の力量に頼り、標準化できていなかった

PFC作成後

- 薬剤師が必要としている情報を他職種スタッフが把握
- 看護師が「患者の状況」「優先順位」を教えてくれるなど、スタッフ同士の情報共有が活発になった

ケアすべき患者との関わりを適時
てるようになった

※PFC=Process flow chart

②病棟・DPCごとに
指導料1の算定率を確認

- これまで
- EFファイルデータをExcelで分析、件数と概算算定率の把握、症例の詳細分析までできていない
 - とにかく薬剤師が頑張るしかない!という結論で、指導料1の継続的な件数増加を試行

「EVE」「Medical Code」の活用で

- 病棟・診療科・DPCごとに算定率を確認することで、指導できている疾患、指導できていない疾患が明確に分かるように
 - 病棟担当者個々の肌感覚から、実績データを客観的に把握できることで、病棟・疾患毎の具体的な取組を考えることができる
- ※PCI=Percutaneous coronary intervention (経皮的冠動脈インターベンション)

③患者スケジュールを
把握する仕組みの構築

- これまで
- その日の朝に「退院すること」が分かる
 - 新規薬剤を投与するタイミングが分からない

PFC作成後

- 看護師が「今後の予定」や「新規薬剤投与のタイミング」などを教えてくれるようになった

必要な薬剤管理指導を適時実施できるようになった

④病棟薬剤師への
応援態勢構築

- これまで
- 病棟薬剤師が1日2~3時間、調剤や外来抗がん剤調剤など、担当病棟以外の業務に携わっていた
- 指導時期に病棟に行けない、カンファレンスに参加できない

薬剤師の配置を見直し

- 2の症別別の実績データを基に、一部の病棟では1日中誰かが病棟にいられるように薬剤師を配置した

他職種との情報共有がしやすくなり、適切なタイミングで、患者と関わりを持てるようになる

3 取り組みの成果

1 算定率・診療単価向上

■薬剤管理指導料1の算定率向上

	算定可能件数	算定実績件数	算定率 (%)
2018年6-8月	5,245	541	10.3%
2019年6-8月	5,012	1,997	39.8%
2020年6-8月	4,371	2,415	55.3%

■取り組み3カ月間の増収額 ※指導料1,2計
3,701,400円

=年換算約1480万円の増収見込

■職員の意識変化

- 患者に必要な医療サービスだから診療報酬が算定可能ということを理解、データで成果が見えるようになり、取り組みに意義を感じながら、普段の仕事に落とし込めるように。
- 目標達成に向けた自発的な行動につながる

2 医療サービスの質向上

- 薬剤師から患者に薬剤について説明する機会が増えた →患者が薬剤師の説明通りにセルフケアしている姿を看護師が確認できている
- 薬剤師が患者の入院中に関わりを持つことで、退院後の患者と外来で会話が弾む、外部の薬局に情報提供しやすくなるなど、良い変化を実感している

今後の 取り組み 予定

①経営支援チーム「We MUST」

さらなる医療サービスの質向上、経営改善を目指し、多職種が参加する経営支援チーム「We MUST (Well Management & Upgrade support team)」を立ち上げ、「救急医療管理加算」や「周術期口腔管理料」を重点課題として挙げ、取り組んでいる

②PXサーベイ導入、医療サービスの質を可視化

2020年4月より、PXサーベイを年3回実施。「薬剤師による指導」なども項目化し、医療サービスの質を可視化=評価

※PX=Patient Experience (患者経験価値)



京都市立病院
Kyoto City Hospital

独立行政法人京都市立病院機構京都市立病院

開設: 1965年12月1日
病院長: 黒田 啓史

所在地: 京都市中京区壬生東高田町1の2
病床数: 548床



健全な病院経営支援のため情報活用基盤

CADA-BOX

“人”“データ”をつなげ、経営に活かす

病院ビッグデータ革命の 最適解!!

院内業務改善

業務効率化

帳票作成業務に
多くの時間を割いている



決まった時間に
帳票を自動出力



**3日かかる作業を
3時間に**

帳票に使用するデータをCADA-BOXにセットすると、決まった時間に帳票を自動出力します。院内会議で使用する帳票だけでなく、国に提出する施設基準の届出等にも対応予定です。

収益向上

算定漏れを
減らしたい



算定対象者を
“毎日”一覧で表示!



**算定率を上げて
収益向上**

毎朝、月内に算定可能な患者を一覧化し、「実施入力」を確認できます。日次で確認することで、算定漏れを防ぐことができます。

患者満足度アップ

PHR(パーソナルヘルスレコード)



医療機関を受診した際の診療記録や健診結果をスマートフォンやタブレット、パソコンなどでいつでもどこでもご覧いただける、人が一生涯の健康・医療情報を自ら管理できるPHR(パーソナルヘルスレコード)サービスです。

